

---

# 復活魔王と新勇者

分福茶釜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

復活魔王と新勇者

### 【Zコード】

Z5970Z

### 【作者名】

分福茶釜

### 【あらすじ】

勇者と魔王との大きな争いから数年後、世界はつかの間の平穏に包まっていた。魔王を倒し、伝説の勇者と崇められる父と、勇者とともに魔王を倒した魔法使いの母を両親に持つアレイは周囲の期待を重荷に感じつつも幸せに暮らしていた。……しかし、彼が13歳の時、再び世界を乱し始めた魔物達によって家族を失ったアレイは、両親の復讐を胸に誓つて旅に出る…………のだが旅の途中、大昔に封じられていたらしい魔王の封印を解いてしまつ。

魔物に復讐を誓つ少年勇者と、はるか昔に封印された魔王との奇

妙な冒険が今始まる。

## 第1話 魔王と勇者（前書き）

『ヤマアラシのジレンマ』

一匹のヤマアラシは凍えた体を互いに温めようと寄り添つ。しかし体についた針が互いの体に突き刺さりたまらず聞をとる。しかし寒くてまた近づく。針が刺さる。離れる。……

これを繰り返すうちに針が刺さらないで互いに温め合える聞合いかはかれるというわけだ。……まあ、大抵の場合その聞合いかはかる前に互いに傷ついて死に絶えることが多いが。

## 第1話 魔王と勇者

「おかーさん、あのね……僕ね、大きくなつたらお医者さんになるーー！」

小さな子供。まだ世界のことなんて何にも知らない無邪気な笑顔で将来の夢を語る。

「まあ、ならお母さんが病気になつても治してくれるのね？」

「うんー！僕、おかーさんもおとーさんも村の人もみんな絶対に助けるお医者さんになるっーー！」

「まあ、頼もしいわ…………アレイ」

これは……一人の少年のはるか昔の記憶。

「ドゴオオオオオッー！」

巨大な爆発音で俺は目を覚ました。まだ頭が完全に状況を把握する前に、グイッと首根っこをつかまれ勢いよく後ろに引っ張られる。と直後、俺のいた場所に鉄でできた棍棒が振り下ろされた。

「ふむ、この状況で寝ぼけているとは貴様はやはり肝が据わっているな」

俺を引っ張ったのは、一点の穢れもない漆黒の髪をなびかせる一人の女。飾り下のない黒いタイトドレスに、絹でできているという黒のロンググローブや黒いブーツで身を包んだ黒ずくめの格好だ。唯一、黒でない物といえば頭の鈍く光り輝く鉛色のティアラだらうか。

「ほら、何をしている勇者。さつさとあの『デカブツ』を倒せ。死ぬぞ！」

彼女の指さす方を見れば巨大な魔物が大きな鉄の棍棒を振り上げてこちらに襲いかかってくるところであつた。

「あぶねつー？」

間一髪振り下ろされた棍棒をかわすと俺は魔法の詠唱を始める。詠唱で少し時間はかかるがこいつ相手には一発でかいのをかまさないと長期戦になる。長期戦になるのは面倒だ。

「我に宿りし聖なる炎よ、今我に力を与えよ 炎爆！！」

詠唱が終わると同時に、火炎の渦が現れ巨大な魔物は火に包まる。魔物はしばらく悶え苦しんでいたが、やがて力なく倒れるとそのまま燃え尽きた。肉体はでかかつたけど大したことはない、所謂雑魚という奴だらう。

「つむ。やればできるではないか勇者よ

「起こしてくれてもよかつたと思うんだよね……」

「なぜ私がお前を起こさねばならない。そんなことでは魔王は倒せ

んぞ」

「魔王のお前に言われたくないけどな」

そう俺の横に立つて燃え尽きた魔物の亡骸を見下ろしているのは、紛れもなく魔王だ。ただ……今の魔王ではない。話せば長くなるが、俺のちよつとしたへマで大昔に封印されたと言つ魔王を蘇らせてしまったのだ。ホントに……世界のみんなごめん。責任を持つて俺がしっかり見張るから……どうか俺を恨まないでくれ。

「これは……きっとトロルだな、大方住んでいた森を人に追われてふらふらとしているところを私達と遭遇したのだろう。人がいると知つて怒りに我を忘れたようだ」

「なあ……何でこう、魔物と人間つてのは上手くいかないんだろうな。魔王を倒して少しは平和になつたかと思えば、今度は人が魔物の住処を荒らすし……それに怒つた魔物が人を襲つたりさ……」

「ん、貴様はヤマアラシのジレンマといふ言葉は知つているか?」

聞いたことがある。たがいに身を寄せ合おうとするが自らの体の針で互いの傷をつけあつてしまつといつことだった筈だ。

「人と魔物の関係はそれと似通つてゐるのかもしれないな。人も魔物もどちらも平和を望んでゐる。しかし両者の考えは食い違つてゐる。そしてどちらも自分の種族以外を見下す傾向にある。これでは手を取り合つて……なんてやつてゐる場合ではないな」

「なあ、気になつてたんだけど……魔物も平和を望んでゐるのか?」

「それはそうだろう。誰も争いたいなどとは思つてはいない。しかし魔物は人間を下等な種と考える。平和に暮らすためには暮らしを脅かすかもしない野蛮な人間を排除しようと考えるのは、まあ人間には納得いかないかもしれんが必然的な流れだ」

「そりゃ……人間もそう考へてるのかもな」

人間が魔物狩りを始めた理由もそういうものかもしない。俺は自分の倒した……いや、殺した魔物を見つめる。

「まあ、綺麗事を言つても純粋に人を殺すことが好きな魔物もいるがな」

「なんだそりや……」

せつかくの雰囲気がなんだかしまりのない空気になつてしまつた。俺は今の魔王の言葉で一瞬、心の奥底に浮かんだ人間も純粋に魔物を殺すのが楽しいだけなんじゃないか……といつ疑問をかき消して彼女に口を開く。

「行こう魔王。この先に魔物に襲われた村がある」

「……村か。しばらくぶりだが。襲われた村など危ないだけではないか？」

少しだけ顔をしかめる魔王。どうやらわざわざ危険な場所には行きたくないようだ。だつたらついてこなければいい話なのだが、なぜかこの魔王は俺についてくる。……なんでも封印を解いてくれた礼にひよっこ勇者の俺を見守ってくれるのだとか……俺は、はつき

り言つて魔物が大つきらいだ。だからさつきのトロルも人のせいです  
住処を追われたのだとしても特に何も感じないし、この魔王も本當  
のところはすぐにでも斬り倒したいのだが今の俺にはまだ魔王を倒  
せる力はないし、一応命の恩人的な立場でもある彼女を殺すのもは  
ばかられる。

「いいんだよ、俺は魔物に復讐がしたいんだから

「ん、貴様の好きにしろ」

魔王である彼女の前で「魔物に復讐する」と言つたのは自分でもどう  
かと思ったがもう何度かこのセリフは彼女の前で使つてはいるし、当  
の彼女が気にする様子もないのだから良いのだろう。

## 第1話 魔王と勇者（後書き）

どうも、お読みいただきありがとうございます。  
稚拙な文章ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

## 第2話 勇者の夢（前書き）

### 『夢』

寝ている間に見るものの方ではないと言つておく。

夢は誰もが見るものだろう。否定する者もいるが無意識に見ているので気が付いていないのかもしれない。簡単にいえば夢とは広い意味での欲求である。欲求はその者自信がどうこうできるものではない。人が欲求を捨てない限り人は夢を見続け、そして人は永遠に欲求を捨てるとはできない。

## 第2話 勇者の夢

今から8年ほど前……

「さあ、アレイちゃん。今日も魔法教えるわね？」

俺の母親、名前はエリーヌ。6年前の魔王討伐の際に勇者とともに魔王を打倒しそのまま勇者と恋に落ちた大魔法使い。彼女の魔法の力に対抗できるものは世界でもいるかいなかからない。

「うん。おかーさん……今日は何をするの？」

当時5歳の俺は両親から優れた魔法と剣術を教えられ、5歳にしてはかなりの力を持つていた。それゆえ周囲の期待も大きかつたが……

「それじゃー……今日はアレイちゃんのために治療魔法を教えましょーー！」

「えっ！…ホントに！…やつたあ！…」

その頃の俺は勇者でも魔法使いでも無く、医者になることが夢だつた。どうしてかと言わればよくわからないが、病人やけが人を治してしまつ……そんなお医者さんとやらにあこがれていたのだろう。しかし、周囲はせっかくの俺の剣術と魔法の才能を放つておけなかつた。魔王を倒したばかりでまだまだ人間の暮らしも安心しない中、今度は人間達がいざこざを起こし始めたのだ。もはや伝説となっている両親の息子 しかも両親の優秀さを受け継いでいる

を利用すれば世界の盟主的な存在になれると俺の祖国は考え

た。また、魔王を失つて統制の利がなくなつた魔物から自分達の暮らしを守つてほしいという村人達の期待もあって、俺は国からも村人達からも次代の勇者になることを期待されていた。

俺の夢を知つていた両親は気にしなくていいと言つてくれていたが、頻繁にやつてきては俺を積極的に勇者にさせるべきだと口づるさく言う宮廷の役人には手を焼いていたようである。

「そうねえ……普通、治癒魔法って言えば水魔法が一番基本なんだけど、難しいのを先に覚えれば簡単なのも覚えられるから混合魔法での治癒を教えるわね？」

「うん……」

両親は俺を勇者に育てるためではなく、将来どのようなことが起つても対応できるように、魔法や剣術を教えてくれていた。特に母は、俺の夢のためには欠かせない治癒魔法を積極的に教えてくれていたのだ。

「うーん……俺はそっち方面は全然ダメだからなあ……」

医療系に関する才能を持ち合わせていなかつた俺の父親、ジャー  
ドは、いつも俺と母が行う訓練を羨ましそうに見ていた。自分も才  
能があればアレイに存分に教えてやれたのに……エリースばかりす  
るいぞ。……それが彼の口癖だった。しかし父から教えられた、状  
況の把握の仕方や、緊急時での判断力などは治癒魔法と同じくらい  
俺の夢には重要なものであったのだ。

「うふふジャード、もうあなたは用済みね。これからアレイちゃん  
は私の訓練だけで十分みたいだわ」

「なーーなんだつーー?ま、まだだ、まだ俺にはアレイに教える」とが山ほどある……」

「あーり?」の前、アレイは天才だーー、俺の教えたことをみんな覚えてしまつたぞ!! とか言つてなかつたかしり?」

「んん!?そ、そんなこと言つたかあ?」

「言つたわよーー誤魔化そうとしてもダメなんだから」

両親の訓練は厳しかつたが決して俺の限界を超えたものは求めなかつた。

そうして……ゆつくり、少しずつ確實に両親の力は俺に継承されていったのである。

「いーや、言つてないね」

「せええつたい、言つたわーー!」

「おかあさんーーふざけてないで治療魔法教えてよつーー!」

楽しくて自然と笑みがこぼれる、そんな毎日を俺は両親と送つていた。思えばこの頃が一番楽しかつたかもしれない。魔王を倒し数年、人の生活も徐々に向上してきているまさに人々が夢を見始めた時期だったのかもしれない。

## 第2話 勇者の夢（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

……短いですかね？

### 第3話 ペンダント（前書き）

#### 『一番星』

辺りが暗くなつてきたときにふと空を見上げると、光り輝くものが一つだけ見えることがあるだろう。それが一番星である。日が沈むか沈まないかの絶妙なタイミングでなければ見ることは叶わず、季節、気候などの影響で見える時間も決まつてゐるわけではない。さて、話は変わるが都會に住んでゐる者が一番星を見つけても喜ぶのはまだ早い。よくじつくりと見てみよう。今動かなかつただろうか？それは人工衛星である。

### 第3話 ペンダント

ぴちぴちと小鳥のさえずる声でアレイは目が覚めた。今日は両親が王宮にお呼ばれすることと、家にはアレイ一人であった。もう少し正しく言うとすれば人間はひとりである。家にはエリーヌがアレイのために魔法で作ったメイド人形がいて、すでにアレイの朝食を用意していた。

「もう、おかーさん……僕は一人でもだいじょうぶって言つたのに」

「アレイ様。お食事の用意がでております」

「うん。ありがとう」

アレイは出された朝食を食べ始める。エリーヌが作ったメイド人形だからか、料理の味付けもエリーヌそっくりである。食べなれた母の味付けと全く同じ料理を食べ終えるとアレイはメイド人形に告げる。

「僕今田は、森に遊びに行くから」

「かしこまりました。遅くならないうちにお戻りくださいませ」

「うんっ……わかった」

アレイの住む村から歩いてすぐ近くに小さな森がある。森と行つても小さな規模の物だが、そこに流れる川で、魚釣りをするのがアレイのひそかな楽しみであつたのだ。

アレイは自分で作った竿を持って、雲ひとつない空の広がる家の

外へかけていった。

森の中は、太陽の光を適度にさえぎり、ほのかに暖かい森の中は気持ちの良い風が吹いている。アレイは、さほど時間もかけずに、目的の川へとやってきていた。しかし、川からバシャバシャと水を立てる音がして顔をしかめる。あんなに水を立ててはせつかくの魚がみんな逃げてしまう。一体誰が何を川でやっているのか……

「ああっ、もう……くわつ

アレイが木の陰からこつそり川の方へ目を向けると一人の少年が川で何かを探すように、川の石をゴロゴロと転がしている。気がつくとアレイはその少年に声をかけていた。

「ねえ、何やつてるの?」

「ああ? おまえには関係ないだろ? がつ、ああくそ

少年はアレイの方を見もせずにそう吐き捨てた。アレイはひょとだけむつとしたのでその少年に言ひ返してやる。

「関係あるよ。僕はここに釣りに来たんだ。君がそんなに水をはねさせたら魚が寄つてこなくなっちゃうよ」

「……

アレイの言葉に少年の手が止まる。相手が静かになつたのを見てアレイは早速釣りの準備に取り掛かるが、ふと少年を見ると体が小刻みに震えている。不思議に思つて少年の顔を覗き込むと、ポロポ

口と涙を流していた。

「えっ！…ちよ…ちよっと、どうしたの！？何があったの？」

「ハハハ…………おかあさんかわいい…………もひつた…………ふぐう…………ペンド  
ントが」

少年の話だと、何でも母親からもうつたペンダントを川に落としきつたのだと……

「あ～もうつ……何で早く言わないかなあ」

アレイは釣竿を置くと川に入つて先程の少年のように川の石をひっくり返したり田を漬らしたりして、ペンダントらしきものを探す。

「ねえ……それってどんなペンダントなの？分からないと探せないんだけど」

「え……あ、赤い宝石のついたのなんだけど」

アレイは釣りをあきらめて少年の宝石探しこと」と付き合つて

とにした。

しばらく辺りには、一人の子供が立てる水の音だけが響いた。

＊  
＊  
＊

「あ……あつた……」

アレイは赤い手口のついたペンダントを手に提升了眼を上げる。

「ええ……ああ……ホントだつ……」

アレイの手にあるペンダントを見て少年はぐこつと田をぬぐつと  
につにつと笑う。すでに辺りは夕焼けで美しい赤色に包まれてゐる。

「……ありがとひ。本当に」

よほど大事なもののがギュッとそれを抱きしめてアレイに礼を  
言つてくる少年。

「ん、どうこたしまして。……そんなにそのペンダント大切なもの  
なの？」

アレイは、釣り道具をかたずけながら向とは無じてその少年へと  
口を開いた。一瞬表情を曇らせた少年だが、意を決したように  
アレイに向を直る。

「このペンダント、お母さんの形見なんだ……あたしがおよめに行  
くときもこいつ」

本当にあつがとひと、また礼を言つてきた少年にアレイは首を左  
右に振る。

「やうなんだ。じゃあもつ落とせなこよひになことね……そのペ

「トランダ」

母の形見であるのだといつペンダントを抱きしめながら嬉しそうにしている少年に自然とアレイも口元が緩んだ。……ん？……アレイはふと疑問を抱く。

「あれ?……そのペンダントってお母さんの形見なんだよね?」

「え？ うん…… そうだけど？」

「……さつきお嫁に行くときつて言わなかつた？」

「えつ！？……言つたけど」

「お、女の子だつたのつー！」

アレイは驚愕で、大きな声をあげてしまう。アレイの近くにいた川鳥がその声に驚いて飛び去つて行くほどに。少年……改め目の前の少女は、アレイの様子にぽかんとしていたが、少しして顔を真つ赤にするとアレイを怒鳴り付けた。

「お、男だと思ったのかーー。あ、あたしは女だつーー。」

「だ……だつて、しゃべり方だつて男の子みたいだつたし……」

田の前の少女はショートヘアで飾り下のない服に身を包んでいる。今はそうでもないが、先程川でペンダントを探している時のきつい顔つきを見たら、少年に間違えても仕方ないだろう。

「それは……家はおかあさんが早くからいなかつたから」

しゅんと元気をなくす少女にアレイは慌ててかぶりを振る。

「い、いや、僕がちゃんと見てなかつたからだよっ……そ、それよりも君、名前は？」

「え……あたしはレイナ」

「ふうん、僕はアレイつていうんだ。じゃあ、またね……」

アレイは荷物を持つて家へと走つて帰る。メイド人形に早く帰るようになっていたのを忘れていた。せめて一番星が出る前に家に着かないと……

「……またね……」

レイナは風の様に走り去つていいくアレイの後姿を見て小さくつぶやいた。彼女の中でアレイのまたね、という言葉がまた聞こえてきた気がした。

レイナは嬉しそうにペンダントを握りしめるともう見えなくなってしまった少年のことを考えながら帰路に就いた。

### 第3話 ペンダント（後書き）

お読みいただきありがとうございます。文章力のなさのせいで分かりにくかったかもしれません、アレイと魔王が出会った8年前のお話です。（つまり前回からの続き）当時アレイ5歳。そしてアレイが5歳の時から6年前（つまり魔王とアレイが出会った4年前）にアレイの父が魔王を倒したという設定です。

ちなみにアレイが一緒に旅して魔王はアレイのお父さんが戦つた魔王とは別物の魔王ですからねえ。

## 第4話 英雄の義務（前書き）

### 『義務』

その立場にある人として当然やらなければならないとされていること。

だがその定義付けは極めてあいまいであり、それを見定めていくのは至難の業だ。義務を負わずに権利だけを求める者、過剰に義務を負わせられる者など多くの差が世界に生まれてしまっている。出来れば前者になりたいが……唯の我が今まで自分勝手な者と周囲に思われるだろう。

## 第4話 英雄の義務

「……」は、アレイ達の住むロレッタ王国・国王の王宮。その王宮にジャードとエリースは呼びつけられていた。何でも、ロレッタ王国の北に位置するスフィノ帝国と国家間が悪化し今にも戦争へと突入しそうなのだと。魔王を倒した一人ならば何か名案を思いつくではないかとのことで今回は呼ばれることになつたらしく。

「全く……戦争なんてやうなきや……話だらう。わざわざ俺達を呼びつけて何だつてんだ」

国王の元へ向かいながら、ジャードは小さくため息を吐きながらぼそぼそと愚痴をこぼす。エリースはそんな夫に苦笑いしながら、彼に口を開いた。

「あつと、国王ともなると大変なのよ。それぞれ厄介事を抱えてるわけだし」

「それにしても……わざわざ俺達を呼びつけるのは……」

ジャードが言葉を言い終えないうちに一人の男が、二人を出迎える。黒い服を着た、長身の男は、ジャード達を見ると恭しく頭を下げ、自分を国王に仕える貴族だと紹介する。

「本日は、わざわざ足労下さり、誠に感謝いたします。私、国王陛下に仕える、レイフォード・エリオスと申します」

「ん~、で、今日は何でわざわざ俺らを呼びつけたんだ?」

「？ 事前にお話しあおいたはずですが」

「それ以外にも何か理由があるんだろ？ って聞いてんだよ」

ジャーデの言葉に、やつとレイフォードは彼が何が言いたいのか分かったのか口だけにやりと笑い、落ち着き払った様子でジャーデとエリースにゆづくと口を開く。

「「れは」れは……やはり、6年前に魔王を倒されたお一方は違いますね」

「せつめつ聞え。何が目的だ？」

「やつ慌てずに。私はお一方にスフィノ帝国との戦争に参加していただきたいのです」

口元に笑みを浮かべたまま、レイフォードは「ともなげにやつ言って見せる。つまり魔王を退治した英雄に今度は戦争に参加してほしいと言つのだ。

「ふざけるのも大概にしろよ……なぜ俺達がそんなものに参加しないではいけないんだ？」

「ふざけるも何も……私は貴方達ロレッタ王国国民の英雄に当然のことを求めているので」じぞこます」

「当然のこと……ですか？」

それまで口を閉ざしていたエリースも不機嫌そうに、田の前の不敵な笑みを浮かべる駄々と口を開く。

「ええ、貴方達は英雄として、ロレッタ王国の民を救うと誓つ義務があります。……それに貴方達はこのロレッタ王国だけではなく、世界的にも有名な御方です。上手くいけば戦わずして、スフィノ帝国との戦争にも勝つことができるかもしれません」

「だが……もし戦つことになつたら、その時はどうするんだー？」

「多くの魔物達と戦つてきた貴方達なら簡単なことだ」ゼロこましょう？ 所詮相手は人間の兵。お一方の力をもつてすれば、勝つことなど造作もないことだと思いますが？」

田の前の男に激しい嫌悪感をジャードは持つた。いやきっとヒリーヌも持つているのだろう。おそらく兵など戦争の道具としか考えていない彼に取つてみたら、勇者と大魔法使いはとても便利な道具なのだろう。ジャードは笑みを浮かべて居る男に吐き捨てるように言つた。

「お断りだね。俺達はそんな戦争に参加するつもりはないし、国王に起こさせることももない。俺達は今日、国王に助言を求められてやつてきたんだ、そんな話をする気はない」

ジャードの言葉にレイフォードは少しだけ残念そうにしながらも、口だけの笑みは崩さずに答える。

「やつでございました。本日来ていただいた理由は、国王陛下に意見を申し上げることでござりましたね……ではござひたお越しください」

彼の表情は、まるでジャード達を聞き分けのない子供の様だと思

つて いるようだ。レイフォードはくるりと一人に背を向けると、国王の部屋へと案内するために歩き出した。

そんな彼の態度はまるで、どんなにジャード達があがいてもロレッタ王国がスフィノ帝国と戦争を起こすのは変わらないと言つて、 ジャードは無意識にギュッと握りこぶしに力を込めた。

## 第4話 英雄の義務（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
ご意見、ご感想、誤字脱字報告受け付けてますよ。

## 第5話 国王の惑惑（前書き）

### 『亀と人間』

亀が人間の先を歩いているとき、永遠に人間は亀に追いつくことはできないらしい。これが俗に言う「アルキメデスと亀」の理論だ。人間が亀との距離を詰めている間に、亀は少しだけ進むからその距離を永遠に埋めることは不可能なのだと…………納得いかないが、理論上成り立つのだから不思議だ。

## 第5話 国王の思惑

「国王陛下、失礼いたします」

レイフォードが軽くドアをノックすると、重々しい声で、入れ、  
と言つ短い単語が聞こえてくる。その声にレイフォードはゆっくり  
と静かにドアを開けた。部屋には美術品の数々が置かれ、大きな椅子  
に座つた国王が笑顔でジャード達を迎える。実は国王とジャード  
は古い友人であり、若い時はよく一緒に剣の相手をした仲なのだ。  
ジャードは彼の事をよく知つてゐる、彼は間違つても無益な戦争を  
起つすよつた人間ではないことを。

「よく来てくれた……ジャード、そしてエリースさんも」

「お久しごりです。国王陛下」

エリースは国王陛下に軽く会釈を返す。しかしそんな和やかな雰  
囲気も一人の男によつて壊されることになった。

「国王陛下、本田御一方には無理を言つてきていただいたのです。  
早急に本田の目的をお伝えくださいませ」

「うつ……分かっている……お前はまさかこの一人にもそんな態度  
をとつたのではあるまいな!？」

「国王陛下、話がずれております。そして私の態度は誰であろうと  
も決して変わりはいたしません、さあ、早く本題へと移つてくださいませ」

「う、うぬやー……分かつてこる。お前がいると落ち着いて話もできん。しゃまじりの部屋から出てこわつ……」

国王の言葉に納得いかないと言つむつた表情を浮かべていたレイフォードだったが、少しして、……かしりまつました。……とだけ言うとそのまま静かに部屋を出て行つた。

「ふう……奴には困つたものだ」

溜息を吐く国王に、ジャーデは自分の疑問をぶつけた。レイフォードとの会話からずっともやもやと心に引っかかっていたものだ。

「おこひ……お前、本当に戦争なんてする気じやないよな？」

「は？ 戦争をするなんていつ言つた？ そもそも今回は戦争を回避する案を一人に考えてほしくて呼びつけたと手紙に書いてあつただろ？」

その言葉にジャーデはほつと胸をなでおろし、ヒリースも肩の力を抜いて緊張を解く。そんな一人の様子に国王は首をひねつた。

「一体何なんだ？ どうかしたのか？」

「いや、せつその……レイフォードだったか？ あいつが俺達に戦争に参加してほしことて言つてきてな」

「なんだと！ そんなことを言つたのか！ ？ ？ ？ うむ。まあ、あやつの言つことも分からぬがないのだがな」

「分からぬもないだと！ ？ ふざけんなつ……」

「ちよつ……ジャード……」

怒鳴りながら今にも国王へ殴りかかるつとするジャードを必死でエリースは止めた。激昂するジャードに国王の表情も少しだけ曇る。何か国王には国王なりの考えがあるのだつ……エリースは国王がどういった考えを持っているのか聞くべく、未だにさわいでいる自分の夫を魔法で動けないように拘束してから口を開いた。

「おこつ……エリースなぜ邪魔をする」

「ちよつとあなたは黙つて。……国王陛下、今の発言はどうこう意味でしょつか？」

「つむ……今の状況で戦争を起こせば確実に多くの者が死に、そして戦争で勝つても負けてもこの国は疲弊する。しかし……どうやら相手は戦争をやる気満々の様でな、こちらが和平交渉を持ちかけても一向に反応せん。むしろ自分達を油断させるために和平交渉を持ちかけているのだろうと思われ、逆に警戒されてしまつていい。レイフォードが言つようにお前たちが戦争に参加すれば、確かにこちら側の戦力は格段に上がり戦争に負けることもなく被害も少ないだろ」

「確かにそうですが……陛下はそれを望んでいるのでしょうか？」

エリースの真剣な表情に、国王は静かに、しかしあつさつと一人に聞こえるように言った。

「私は戦争をしたくない」

「そうですか、分かりました。陛下のお言葉を聞いて安心しましたわ。ねつジャード」

エリーヌは国王の言葉ににっこりほほ笑むと、自分が拘束しているジャードへと田を向けた。ようやく落ち着いたのがジャードも冷静になつたようだ、もう暴れる気はないようだ。

「さつ、では三人でどうすればいいか考えましょう」

\* \* \*

国王の部屋を出てきたレイフォードは一人、王宮の廊下を歩いていた。

……国王陛下はどうにか和平交渉を成立させようとしているようですが……

再三、ロレッタ王国が和平交渉を申し込んでもその返事は全く来ずスフィノ帝国はどんどん戦争に備え軍備を増強している。もはやこれは話し合いで解決できる領域を超えているのは明らかだ。レイフォードは歩いていた足をとめた。

……仮に、勇者達が戦争に参加しなかつた場合、我々の軍事力とスフィノ帝国の軍事力は五分五分。これでは両国に甚大な被害が出るほか、勝てるかどうかも分からないです。そしてもし仮に、勇者が何らかのきっかけで、敵国に渡つてしまつたら……確実に我々

は負けることになる。……

「参加されない」のであるならば……危険分子は取り除いておいた方が良さそうだ」

レイフオーラーは、くつろと笑つと止めていた足を進める。廊下には彼の靴音だけが響いていた。

## 第5話 国王の思惑（後書き）

いや、いつもながらカスイ文章力ですんません。

## 第6話 一人の食事（前書き）

### 『召使い』

雇つて家の雑用をさせる者のことである。

下男・下女ともいわれ、雇い主に対しても絶対的な忠誠を誓わなければならぬ。ただ、召使いは【奴隸】ではないため基本的人権が保障されており、給金ももちろん存在する。

## 第6話 一人の食事

「アレイ様。こんなに遅くまで一体どちらへ？」

「いやちよつと……」

アレイが家に着くと、無表情で家の前に立っていたメイド人形。どうやらアレイの帰りが遅いので、家の前に立つてアレイの帰りを待っていた様子。辺りは、すでに暗くなり、民家には明かりがともつていて。

「アレイ様……私は早くお帰りになるよつに申し上げたばずですが？」

「う……じめんなさい」

詰め寄るメイド人形の視線が痛い。

「アレイ様、本日旦那さまと奥様はお帰りにならないよつです」

「えー？ ど……どうして？」

まさか、あの両親に限つて厄介事に巻き込まれたりはしないはずだが……

アレイが不安そうな顔をしているのに気がついたのか、メイド人形は遅くなる理由をアレイへと説明する。

「旦那さまと奥様は本日宮殿でお泊りになるよつです、お帰りになるのは明日になるかと」

「あ…… そなんだ」

「はい、ですから」安心を。さあ、アレイ様。風邪をお引きにならないように、元お部屋に

メイド人形は抑揚のない声そう言つと、アレイの手をとつて家中へと入る。彼女の手は随分と冷たくて、アレイにまるで体温を感じさせなかつた。

「ねえ、どのくらい外で待つてたの？」

「私でござりますか？………… そうですね、私がこの家の仕事を片付けたのが、正午過ぎでござりますから、それからずっとですね」

つまり、このメイド人形はずつと自分の帰りを待つて家の前に突つ立ていたらし……。

「た…… 大変だつた？」

「いえ、私は特に何も感じませんでした。………… しかしあレイ様、昼食はどうなされたのですか？ 正午には帰つてくるものと思いましたが」

そこでアレイは自分がようやく何も口にしていないことに気がついた。ペンダント探しにあまりに夢中になっていたものだから、昼食のことなど頭の中からすっかり追い出されていたわけだ。それを思い出したら、なんだか急激にお腹が空腹を訴えてくる。

「ではアレイ様、まずその濡れたお召しものを新しい物に着替えて

ください。そのあとお食事に致しましょ！」

アレイは「ぐくつと頷くと自分の部屋へと向かひ。その途中に、良いにおいがアレイの鼻をかすめた。すでに夕食の準備はできているのだろう。

「うわあ……！ 今日は豪勢だね」

なぜか今日はいつもよりも豪華な料理がテーブルの上に並べられ、アレイは田を輝かせる。

「ええ、本日はアレイ様をお一人になさつてしまつことに田那様と奥様は心を痛めていらっしゃいました。ですから代わりにアレイ様の料理を豪勢にしてほしいと奥様が言わされましたので……」

「へえ…… そつなんだ」

相槌もせじせじにアレイは、料理を食べ始める。一食分抜いただけなのにこんなに空腹なのはきっと必死に川で動き回ったからだろう。暖かい料理は、川の水で冷えていたアレイの体をじんわりと温める。

「おこしこつ……」

「そうですか。それは良かったですね」

アレイの食事の様子を、メイド人形は側に立つて見ている。しばらくアレイは食べることに夢中だったが、ふと……直立不動のメイド人形を見やる。

「ねえ、お腹すかないの？ 立つてないで座ればいいのに」

メイド人形は感情の見られない瞳でアレイを見つめると首を振る。

「アレイ様、どうぞお気になさらずに。……何かお飲物をお持ちしましょうか？」

「いや、いいよ。……ありがとう」

アレイは今日会つたばかりのメイド人形に礼を言つと、また食事をとり始めた。思えば、これが初めてアレイが一人で食事をとつた日かもしれない。それまでは必ず両親と食事をとつていたアレイには、ひどくその日の食事は静かに感じられた。

そんな静けさに、アレイはたまらずそばに控えるメイド人形に声をかけてしまう。

「ねえ、本当にお腹すかないの？」

「私は奥様によつて生み出された魔法人形ですから疲れませんしあ腹もすきません」

「でもさあ……」

目の前の魔法人形は的確にアレイの聞いた内容にだけ答えるため、なかなか会話が続かない。そんなメイド人形の言葉にアレイは突き放されている感覚を覚え、一人のさみしさを紛らわせようと話したはずが余計さみしい気分になってしまった。

「「安心ください、アレイ様」

食事の手を止めてうつむいていたアレイは予想外に近くからメイド人形の声が聞こえてきたことに、驚いて顔を上げる。先程まで少し離れた所に立っていたはずのメイド人形はアレイのすぐそばにまで来て彼のことを覗きこんでいた。

驚きで開いた口がふさがらないアレイをメイド人形は優しくなでる。その手は冷たくて人の持つようなぬくもりは無かつたが、なぜだかアレイの心は温かくなつた気がした。

「明日になれば、お父様とお母様も帰つていらっしゃいますから」

抑揚のない声だがアレイを気づかっているのためか、やわらかなしゃべり方のメイド人形の言葉にアレイは小さくうなずいた。

## 第6話 一人の食事（後書き）

話し進まねえ――――

### 『ジャム』

果物の肉に砂糖を加えて煮詰めて作ることができる食品。  
果実や果汁に含まれるペクチンに砂糖と酢が作用してゼリー状に  
やわらかく固まる作用を利用していている。完成した時、比較的果実の  
原型が保たれている物がフレサーブ、オレンジやレモンといった柑  
橘類を原料とし果実が含まれている物をマーマレイドと言つ。  
非常に甘いためそのまま吃ることは少なく、パンやクラッカー  
などに塗つて吃るのが一般的である。

## 第7話 暇な一日

「アレイ様、おはよ'い'やこます」

寝ているアレイの部屋のドアを勢いよく開けて入ってきたのは、エリーヌが魔法で作ったメイド人形だった。完全なる無表情で、全く感情が読めないのだがなぜかアレイには彼女がなんとなく焦っているように見えた。

「ビ……ビつしたのいきなり?」

アレイは体を起しすと一気に覚めた目でメイド人形を見やる。

「申し訳ありません。たつた今奥様から連絡があつたのですが、本日も帰れそうにないとのことであります」

「ええつー?」

「一体宫廷で何をしているのか非常に氣なるアレイだつたが、寝癖のついた頭を少しだけ搔いて、やつくつと布団から出た。

「あと奥様がアレイ様に困つたことがあつたら、危ないから自分でやらないでメイド人形に頼むよつことにおつしゃつておいででした」

「……心配しそぎじやないかなあ……はあ、つていうか、おかげさんとビツやつて連絡とつてゐるのさ」

「私でござりますか? 私は奥様に作られた魔法人形ですから奥様の思念が自由に伝わつてくるのでござります」

「へえ……じゃあ、今おかーさんが何を考えているのか分かるの?」

アレイの言葉に耳を傾けながらメイド人形はテキパキとアレイの部屋を片付けている。

「……すみませんアレイ様。奥様の思念は奥様から送られてきたときにしか分からぬのです。奥様の方はいつでも私の行動を把握できているのですが……」

まあ、それはそうだろう。使う人間は自分の人形の状況を把握しないなければならないが使われる人形が自分の主の状況を常に把握している必要などないのだ。主からの命令があつた時だけそれを確実にこなせばいいのだ。

「アレイ様、朝食の用意がでてきておりますので、着替えが終わりましたらどうぞ」

メイド人形はアレイの使つていてる毛布と、昨日脱ぎっぱなしだつた服をかついで部屋から出していく。窓の外を見るとまぶしいほどに太陽が輝いていた。きっとメイド人形はこの洗濯日和を逃すまいとしているのだろう。

「ん~……今日は何しようかなあ」

食事を済ませたアレイが朝に自分の脱いだ服をメイド人形の所へ持っていくとせつせと洗濯物を干しているメイド人形を見つけられた。

「あ、ねえ……これどうすればいいかな」

「アレイ様……わざわざこのよつなお氣使いをなさらなくとも」

「いいんだよ。今日は特にやりたいこともないし……この水で洗え  
ばいいの?」

アレイはすぐそばにバケツに汲まれた水を指差してメイド人形に尋ねる。メイド人形は複雑そうな…………と言つても表情に変化はないのだが…………様子でアレイに口を開いた。

「お待ちください。その水は何回か使つてしまつてるのでアレイ様のお手を付けるのにはふさわしくありません。私が新しい水を汲んできますのでそれまではお待ちを…………つ…………アレイ様、何をしているのですか!?」

メイド人形の言葉もそこそこにアレイは勢いよくそのバケツに入つた水に自分の服を手ごと入れた。

「だつて、この水まだそんなに汚くないよ?」

「そういうことを私は言つているではありませんが…………」

メイド人形はアレイにゅうくりと近づくと、しぶしぶながら服の洗い方をアレイに教えてくれた。こういうことはあまり教えてもらつたことのないアレイにとつて新鮮で面白い事であったのは間違いない。

「……やうこえばさあ」

洗濯物がひと段落ついたところでアレイはふとした疑問を口にする。

「なまえは？ あるんでしょ」

メイド人形はピタリと仕事の手を休めると、アレイに向き直る。真正面から無表情に見つめられるというのはなんだか緊張感が半端ではない。

「私の名前……ドジョウですか、……そうですね、奥様は私を急ごしらえで作ったようですので即席メイドとでもお呼びくださいませ」

「や……やくせきー。」

「お気に召しませんでしたか？」

「いや……だつて、それなまえじやないよね？」

「そうですか……お気に召しませんか。では、欠陥人形、もしくは雌奴隸なんていうのはどつでしょうか？」

「ちょ、ちょっと……まつてよ。どれもこれも変だよ。なまえがないなら、ないつて言つてつてば」

メイド人形は訳が分からないと言いたげな様子だ。そもそも自分に名前など必要ないと思つてはいるのかもしれない。アレイはそんなメイド人形に向かつて宣言してやつた。

「なまえがないなら僕が付ける！－！」

\*\*\*

「アレイ様、別に私には名前など必要ないのですが……」

「……つるさいな、少し静かにしててよ」

「失礼いたしました」

アレイは自分の持つ書物を開いて唸り声をあげていた。メイド人形の名前を書物にある物語の登場人物の名前から拝借しようと考えたのだ。しかし、いかんせんこれと言つてしつくりくるものがない。

「う~ん……」

「アレイ様、昼食の準備ができましたが？」

「こまはいらない」

「……そりでござりますか」

アレイはメイド人形の言葉に適当に返事をするだけで、本から田を離そうとしない。しばらくはメイド人形もアレイのそばに控えていたが、あまりにも長いので自分の仕事を済ませるために今はアレイのそばを離れていた。

そうして、メイド人形が洗濯物をとりこみ、それをたたんで整理し、薄暗くなつてきたので部屋に明かりをともし、夕食の準備に取り掛かり、良い香りを漂わせる料理をテーブルに並べてもアレイの目は本から離れなかつた。

「アレイ様、お夕食のお時間でござりますが……」

返事はない。メイド人形はゆつくりとアレイに近づくと素早く彼の読んでいる本を奪い取つた。

「あつ……なにするんだよ」

「いい加減にしてください、アレイ様。旦那様と奥様に言い付けてしまいますよ?」

「……つづ」

「ああ、続きはお食事の後になさつたらどうですか?」

アレイはテーブルに並べられた料理に目を向ける。アレイのお腹は小さく空腹を訴えた。

「うん……わかつた」

さすがに空腹には勝てなかつたのか、アレイはテーブルへと向かう。

焼き立てのパンに、暖かそうなシチューが何ともおいしそうだ。

「アレイ様、パンにジャムはお塗りになられますか?」

「うん、おねがい」

メイド人形は無駄のない動きで、ジャムの入つた瓶のふたを開けると、パンの上にそれを乗せる。アレイはその様子を見ながらふと、ジャムの瓶に視線を持つて行つた。

そして……

「あああああああああああつ……」

「ど、どうなさいました?」

突然のアレイの叫びにメイド人形もパンにジャムを塗るのを止めてアレイを見つめる。当のアレイはジャム瓶を持つとメイド人形にズイッとそれを差し出した。

「きまつたつ……」

「はあ……一体何がですか?」

「これ見てつ……」

メイド人形はアレイの持つジャム瓶を見やる。何年か前に街に来た商人からエリースが買い取った物だ。何でも腕のいい職人が作つた物なんだとか。

「このジャムがどうかいたしましたか？」

「ジャムじゃなくて見てほしいのはこっち……」

アレイは指で、瓶のラベルを指差す。そこにはしゃれたデザインの文字で商品の名前が記されていた。

「アネット……今日から君のなまえはアネットだからね」

「……アネット」

「うん、よろしくね、アネット……」

## 第7話 暇な一日（後書き）

メイド人形の名前、読者の方から提案があったものを使わせていただきました。ありがとうございます！！

意外とこれからも名前が思いつかないキャラとかが出てくるかも  
しないのでその時は、「俺が考えてやつてもいいぜえ」という寛  
大な方がいたらぜひ、御気軽に感想のところに書いてやってください。  
い。>——<

## 第8話 特別な子（前書き）

### 『釣り』

釣竿、釣り糸、釣り針などの道具を用いて魚介類などの生物を採捕する行為、方法のことである。

釣りの主な対象は、海・川・湖沼・池などの水圏に住む魚類である。この場合、釣りは漁の一種として、陸上生物を捕獲する獵と区別される。そして単に釣りと言えば魚釣りのことを指す場合が多い。釣りを行う場所によって区別して、海釣り、川釣り、磯釣りなどの呼称もある。

## 第8話 特別な子

「……た、ただいま

疲れた顔をしてエリースとジャードが帰つてくる。エリースはまだしも、ジャードの方は目の焦点が合つてなくてただひたすら無言だ。

「お帰りなさいませ、奥様、旦那様

「だ、だいじょうぶ! ? 一体どうしたつてこいつの?」

人形のせいでなのはかは知らないが無表情のアネットとは対照的に両親の変わり果てた姿にうろたえるアレイ。

「うう……もう駄目つ。……眠い

エリースはそう言つなり勢い良く倒れてしまつ。ジャードはふらふらしながらも自室に向かつていった。どうやら一人とも睡眠不足の様である。

「…………僕、今日は釣りにいくてくれるね

「かしこまりました、旦那様と奥様がお目覚めになりました私が  
うなづいておきましょ

アレイはすやすと床で気持ちよさそうに寝る自分の母親を呆れた目で見ながら、溜息を吐いた。

\*\*\*

「あれ？」

釣り道具を持ってアレイイが川にやつてくると見知った顔を見つけた。彼女はアレイイに気がつくと田を見開いて、じっとこちらを見つめてくる。そんな彼女にアレイイは声をかけた。

「やあ、レイナ。今日はどうしたの？」

「あつ……ああ、まつまたあつたな。べつ別に私はこの川でお前を待つてたわけじゃないんだ……何となく川に行きたいな って思つてて……昨日も来ていたわけじゃないんだぞ」

彼女は特に川で何かをしていたわけでもなく一人、たたずんでいた。アレイイの問いかけにあたふたとしながら答えるレイナが何だか面白くてアレイイは小さく笑つた。それを見てレイナはむつと頬を膨らませる。

「……何がおかしい

「いや、レイナってよく表情がこひこひ変わるなあつて思つてや」

アレイイは適当な場所を見つけて座ると釣竿を出す。アレイイの答えが気にくわなかつたのか、レイナはむつとした表情のままアレイイのすぐ隣に腰かけた。

「……どうしたのレーナ？ 僕なんかのそばにいてもおもじろくな  
いよ？」

「もうこいつはあたしがきめることでおまえがきめることじやな  
い」

そつかと小さく返せばそうだと言われてアレイはまた小さく笑つ  
た。『いやつて家族以外のそれも同年代の子供と話すのはアレイに  
とつて初めてのことであった。アレイは生まれてからずっと友達と  
言つものを持つたことがない。いや周囲がそれを持つことを許さな  
かったと言つた方が良いだろうか。アレイの両親は魔王討伐を成功  
させた伝説の勇者と魔法使いである。ジャードとエリースは極力、  
普通の生活を送ろうとしていたようだが周囲からは勇者様、魔法使  
い様と崇められもはや二人は国王に次ぐ有名人となっていた。そん  
な二人が普通の一般国民の様な生活を送れるわけがない。もちろん  
その二人の間にできた子供もまた然りである。

『こらつ！ あんたはつアレイ君に、けがさせたらどうする気だい  
つ！ ……』『めんねえアレイ君……しつの子にはきつへ言つておく  
からねえ』

『アレイ君！ ！ 君はこんなところで遊んでたらダメだつ、勇者に  
なるんだから』

『あれい君はぼくたちとあそんじゃいけないんだつてママがいつて  
たよ』

『そりだよ、あれいくんは、けがしたらたいへんだもん』  
『だから僕たちアレイくんとは、遊ばないんだ』

大人達はアレイを特別な子といつも言っていた。大人達の影響か、次第に子供達もアレイを特別扱いするようになつて、街中の者がアレイを大切に扱つた。ただ……それゆえにアレイは街の皆との間を隔絶された。彼と村人の間には絶対に埋められない溝が生れたのである。アレイは孤独だった。

『アレイ君はずるいよね、みんなから特別扱いされても』

「そういえば、レインアはいつもなにしてるの？」

ピクリとも動かない釣り糸を眺めながらアレイは隣に座る少女に口を開いた。レインアは少しだけ考えるそぶりを見せて、ゆっくりとアレイに答える。

「そう……だな、おとうさんのお仕事のてつだいかな……」

「へえ……他には？」

「他に？」

「さうだよ……例えば友達と遊んだりとか、街に買い物に行くとか

……

アレイは少しだけ竿をゆすつたり傾けたりしながら言葉を続ける。

レイナは少しだけ間を開けた後にアレイの言葉に答えた。

「他にはなにも…………友達いないし…………」

「そっか…………」

小心翼アレイは答えると、水に垂らしていた釣竿の糸を手繰り寄せ、静かに釣り道具を片付け始める。

「どうしたの?」

「レイナ…………今はひまなの?」

「え?」

「一緒に街に行かない?」

## 第8話 特別な子（後書き）

過去編ひつやつて終わらせよいか……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5970z/>

---

復活魔王と新勇者

2011年12月29日22時50分発行